



あの時の茶そば

千葉県千葉市立
小中台中学校・3年
古田健太郎

僕が小学生のころ。今も続いている我が家の毎年の恒例行事である、夏休みに東京都に住んでいる母方の祖父母の家に行く。正月と夏の年2回のみしか行けないので、毎年楽しみだった。

もう1つの楽しみが突はある。それは、祖父に連れられて渋谷の映画館に行くことだ。基本、練馬区にある祖父の家を午前中に出て、昼前の上映を見るという日程だった。そのため、昼食は無論「外食」である。と言っても2人とも大のそば好きのため、毎年そば屋と決まっていた。ある年、映画館を後にし毎年のようにそば屋に行き、毎年のように僕は「ざるそば」を注文した。しかしそこからは例年と違った。僕の注文したざるそばと一緒に運ばれてきた祖父のそばは、当時の僕は見たこともなかった、緑色のそば。そう「茶そば」である。この世のものではないものを見るような目で僕はみつめた。分からなかったのである。どうしてそばなのに、麺なのに緑色をしているのかが分からなかった。しかし食べてみたかった。そこで一口もらうことにした。口の中に入れると食感はそばのだが、どこか遠くで緑色のお茶の香りがした。ほんのり苦いような、でもとても温かいような、とても不思議な食感。僕は改めて「そば」という麺に対して大きな魅力を感じたのだった。

その年の年末。僕は家族そろって近くにあるそば処に行き年越しそばを食べた。無論茶そばである。4ヶ月以上たったその日でも、夏に食べたあの新しい「未知のそば」を忘れることはなかった。あの食感と香りを味わって食べたそばは格段に美味しく、良い年越しができると思った。その後は、機会がなく、食べれていないが、今年には絶対に食べたい。